

海民の日本史 3

大和王権の生成と海洋力

西 川 吉 光

1 大和王権の誕生と

●南九州勢力の大和進出

弥生時代が進むと、稲作技術の発達に加え大陸からの渡来人の波状的な流入もあって北部九州の人口は増加し、水田耕作地の不足が生じるようになった。遅れて九州北部に辿り着いた人々の中には、より適した農耕地を求めて日本海を東進し、あるいは南部九州を目指す集団もいたであろう。しかし南九州は火山灰や深い森に覆われた地域が広がり、多数の住人を養えるだけの広い水田耕作地を探すことは容易ではなかった。南九州での定住を断念し、再度の移住を決意した集団にとって、瀬戸内海は列島を東に向かう際のハイウェイとなった。もっとも、潮の流れが複雑に変化する瀬戸内海を渡るには、この海に精通した海民の協力が不可欠であった。東征の途次、神武一行が豊予海峡や周防灘を扼する宇佐、関門海峡を管理下に置く岡水門（遠賀川下流域）に立ち寄り、さらには水先案内人としての椎根津彦の活躍が記紀で取り上げられているのは、瀬戸内海を東に航海するに際して海民の支援を受けた史実が語り伝えられたものであろう。

彼ら海民との協力関係の下に、九州から近畿地方に移り住んだ集団は多数存在したであろうが、その中の移住集団の長（おさ）の一人が、現在の奈良盆地の東南部（三輪山南麓地域）に自らの定住拠点を築き、さらに彼の子孫が近隣の豪族、実力者との抗争と和合の過程を通してその支配領域を徐々に拡大させ、やがては大和の覇者となっていく。それが大和王権の初期形態であり、移り住んだ大和の地で最初に権勢を確立した長（おさ）は、後に「神武天皇（カムヤマトイワレヒコ）」と称されることになった。神武らのモデルとなった集団が九州から瀬戸内海を経て大和に至り、大和王権の礎を築いたのは2世紀末～3世紀前半の頃と考えられる。

南九州からの移住集団は、大和に入る前、長期間、吉備に滞留している。『日本書紀』では3年、『古事記』によれば8年もの間、吉備の児島（高島宮）に留まり、船舶を揃え、兵器や食糧を蓄えたとある。瀬戸内海の中央に位置する吉備は、瀬戸内航路を扼する重要拠点である。吉備に所在する海民は、瀬戸内海でも最大の海民勢力で、後世の瀬戸内海賊のルーツともいえる存在である。九州から河内、大和に向かうには、この吉備勢力との関係を深め、その支援と協力が不可欠であった。

首尾よく吉備の支援を受け得たであろう神武一行はさらに瀬戸内海を東進し、河内から紀伊半島を経て大和に入り、出雲族らの先住勢力を支配下に治めていった。記紀では神武による天下統一と記すが、実際には抵抗する諸豪族を倒し、あるいは自らの勢力に取り込むためには、かなりの期間

が必要だったに違いない。この大和の統一と王権の樹立に向けた平定の時期が、記紀におけるいわゆる“欠史八代”の時代に該たるものと考えてよからう。

南九州からの新入集団は、正面からの対立闘争をなるべく避け、政治的妥協や婚姻という穏やかな政策で先住の出雲勢力を取り込んでいく途を選んだ。そのため、彼等が奈良盆地を統一するには凡そ百年程の年月を要した。先住勢力の中には、物部、春日、和邇、平群、葛城などの有力豪族が互いに覇を競っていたが、三輪山周辺磐余の地に居を構えた南九州勢力は、3世紀に物部氏、4世紀初頭には春日氏と親密な同盟関係を築くなど彼らとの連合体制を築きつつその支配を強めていった。その営みの中から、事実上の初代大王とされる御間城入彦大王（崇神天皇）が登場したのである。御間城入彦政権の誕生を3世紀末と比定し、畿内初期古墳の発生時期を3世紀前半に遡ると考えれば、その間は70～80年程となる。一代の在位を約10年とみれば、8代にわたる王達の存在は決して不自然ではない。

●水の都纏向

初期大和政権の最初の大王とされる崇神天皇の都は、三輪山の西方、纏向の地（奈良県桜井市）に置かれたとされる。纏向には弥生後期初頭の遺跡の数が少ない。しかし、3世紀初頭になると遺跡が急増する。弥生後期に当たる2世紀中葉以降、纏向への移住の動きが出始め、纏向遺跡最古の古墳である纏向石塚古墳が造られた3世紀初頭、集落の整備が本格化したものと推察できる。

紀元前1世紀中葉頃、河内や大和に有力な小国（クニ）が生まれた。纏向遺跡が出現する直前まで栄えていた有力なクニの遺跡として、大阪府和泉市・泉大津市に跨る池上曾根遺跡や奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡、それに天理市岩室平等坊遺跡がある。いずれも大きな環濠集落であるが、3世紀初頭前後の動乱で相次いで解体し、その際に環濠も埋められている。その直後に銅鐸も一斉に姿を消すことから、これら遺跡の主は出雲等から移住した先住集団で、銅鐸は彼らの祭祀であったと考えられる。なかでも唐古・鍵遺跡は、銅鐸の主要な製造地とみられている。銅鐸を祭祀に用いていたこの出雲系先住集団に代わり、剣や玉、銅鏡を祭祀とする南九州勢力が大和、近畿を支配するようになっていくのだ。

ところで、崇神天皇の都を古事記では「師木水垣宮（しきみずかきのみや）」、日本書紀も「磯城（しき）瑞籬宮」と表記する。この名は、宮殿の周囲を瑞（＝水）の籬（＝垣）が巡っていたことに由来するものと推察できるが、近年の発掘調査の成果から、その伝承が真実である可能性が高まってきた。2009年に桜井市教育委員会が行った纏向遺跡の調査で、3世紀前半の大型建物跡が発見された。またこの建物跡が河川と人工水路で3方を囲まれていた可能性があることも判った。地形や発掘調査の分析から、当時、纏向では微高地の北辺と南辺に河川が東西に流れていたと考えられる¹⁾。東辺は未調査だが、飛鳥時代の古代官道の上ツ道の推定ルートとほぼ一致している。西辺からは、幅8m以上、深さ1.4m以上の溝跡が昭和53年の奈良県立橿原考古学研究所の調査で発見されている。底面の土の堆積から、澱んだ水路ではなく南北の河川と繋がっていた可能性が高く、土器などから溝は大型建物跡と同じ3世紀前半に掘られたとみられている²⁾。纏向は三方を河川と人工水路で囲まれた水の都として築かれており、これは約半世紀後の崇神天皇の「瑞籬宮（水垣宮）」とイメージが一致するのだ。『日本書紀』では、崇神の治績として、始めて船を造ったこと、また任那が使者を遣わしてきたことを挙げている。

●水運ネットワーク拠点としての大和

纏向遺跡の調査から、初期大和王権が水とかかわりの深い政治権力であったことが窺えるが、纏向にとどまらず、南九州の勢力が進出先に選んだ大和盆地そのものが水と深く関わっていたのだ。今日の感覚では、奈良といえば内陸の盆地で、外部からは閉ざされた空間と想起されやすい。周囲を山で囲まれた大和盆地が、外敵の侵入を防ぐ防御上の適地であることは一目瞭然である。だが、大和は水路、水運を利用して全国の各方面と強く結びついた水上交通の要、水の都でもあったのだ³⁾。

大和盆地は、川を通して三方向で外に繋がっている。西に大和川を下れば、河内湖（潟）、難波を経て瀬戸内海に出ることができる。佐保川、その支流の秋篠川を伝い、低い丘陵を越えて北に向かえば、木津川を利用して京都盆地から琵琶湖、日本海へと至る。南に低い山を越えて葛城川から宇賀川に入り、吉野川、紀ノ川に出れば紀淡海峡、紀伊水道、四国、そして太平洋に出られる。さらに大和川（初瀬川）を遡り、東に向かえば伊賀を経て伊勢に至ることも容易だ。

各地方に伸びた水路の中でも、特に重要であったのが大和と難波、瀬戸内海を結ぶ大和川のルートであった。大和川は奈良盆地のほとんどを流域とし、当時は川幅は現在と比べて相当に広がったと推定されている。江戸時代の付け替えによって流れを変える以前は、奈良盆地を出たあと柏原市付近で北上し、河内湖（潟）から大阪湾に流れ込んでいた。唐子・鍵遺跡、清水風遺跡から出土した土器には、かなりの人数で漕ぐ舟が描かれている。柏原市高井田横穴群の横穴にも舟が描かれており、古代の大和川が水上交通の大動脈として利用されていた史実を伝えている。『日本書紀』によれば、推古天皇 16（608）年、遣隋使小野妹子の帰国の際に同行した隋使・裴世清の一行は大和川、初瀬川を舟で遡り、海拓榴市（桜井市）に上陸し、そこから飛鳥に向かっている。推古天皇 18（610）年には、新羅、任那の使者が入京した際、難波から大和の阿斗の河辺の館に入っているが、この館とは現在の安堵町か田原本町付近の大和川の川辺にあった迎賓館と推定されている。仁徳天皇が大和川の瀬戸内海への出口にあたる難波の高津宮に都を定めたことや、難波の堀江（天満川）を掘削して海に繋がったという記紀の記述は有名だ。

大和盆地内の河川は水路、運河として利用できたので、大和川等各水系を遡って大和に入った人や物資は、この水路、運河を伝って盆地内の各地域に運ばれたが、そうした水運交易の中心拠点が纏向付近であった可能性が指摘されている。纏向には出現期古墳の中でも最古級とされる箸墓古墳があるが、箸墓古墳が築かれた付近は、かつて「大市」と呼ばれていた。『日本書紀』の倭迹迹日百襲姫命を箸墓古墳に葬る記事にも、「乃ち、大市に葬る」という表現が見え、付近に交易の場として市が成立していた可能性が高い。大王の祖先たちは、纏向川が多くの支流に分かれ、大和川など各地方に伸びる水路との接続が容易なことから、この地に都を置いたと考えられる。近年における考古学の成果も、それを裏付けている。

纏向遺跡から出土した庄内式土器のうち、15%が大和以外で生産された外来系土器であり、そのうちの約 50%が東海系、17%が山陰、北陸系、10%が河内系、7%が吉備系とされる。全国各地域から大量の土器が纏向に搬入されたのは、大和が水運に利した水の都であったことが与っていたからにはほかならない。大和川を下り河内から瀬戸内を経れば中国や四国、九州、それに朝鮮半島や大陸と繋がる。紀ノ川を使って紀淡海峡、淡路島に出ることも容易だ。琵琶湖を経由して日本海側への進出も可能であるばかりか、伊勢湾・東海とも結ばれ、さらに太平洋の黒潮に乗れば東国にも至

ることができる。人の移動が活発化する3世紀、大和は当時の生活圏としての日本列島の中央に位置し、しかも各方面と水運で繋がっている交通の要衝、大交差点であった。当時の河内はその大部分が潟で、居住には不向きで、しかも西からの攻撃には無防備を強いられた。これに対し、周囲を山に囲まれた大和は高い防御性を備えているだけでなく、水運に恵まれ交易、交通の要衝であった。この高い地理的戦略的な優位さが、統一王権の都にこの大和の地が選ばれた大きな理由であった⁴⁾。

●纏向は卑弥呼の都か？

『魏志倭人伝』が倭人のクニの様子を描いた時期と纏向の発展時期が重なること、また大型建物の存在や、居住地というよりも祭祀的色彩が強い都であること等が倭人伝の描写と類似していること、さらに、近年の学説が古墳出現の時期を3世紀半ばあたりにまで繰り上げる傾向にあることなどから、纏向を卑弥呼の居住した都と比定し、箸墓古墳の被葬者を卑弥呼に充てる学説が有力視されるようになった。

倭人伝が伝えるように、卑弥呼を共立の王とした交易都市国家の連合体は、朝鮮半島や中国大陆との交流を頻繁に重ねていた。しかし、纏向遺跡には大陸文化の色合いが殆ど無く、この地が半島や大陸との交流が活発ではなかったことを示している。後漢や後孫氏の滅亡等大陸半島の政治変動に素早く反応し、使者を送り出していることに着目すれば、卑弥呼連合体は北部九州、それも伊都国かその近辺に位置したものとみるのが自然であろう。中国の史書から日本列島が姿を消している間、倭人社会の権力中枢は北部九州から大和へと移っていく。陳寿が『魏志倭人伝』を著したのは、既に魏が滅んだ晋の時代、即ち3世紀末のことである。魏略などそれまでの倭人の国に関する文献を参照しつつも、執筆に当たっては、当時の倭国の最新情報を彼は重視したであろう。陳寿が『魏志倭人伝』で「邪馬台国」として紹介した国は、3世紀前半、北部九州伊都国あるいはその近傍に所在した、巫女の祭祀の場としての「女王国」ではなく、3世紀後半以降急速に発展を遂げつつあった大和の国であったと思われる。

陳寿は『倭人伝』のなかで、卑弥呼の所在する国を「女王国」としているが、「邪馬台国」とは記していないことに注意する必要がある。日本列島内における権力中枢移転の経緯に疎かった陳寿は、3世紀前半、北部九州に誕生した巫女による卑弥呼連合政権と、3世紀後半、大和纏向に生まれた原初期の大和王権を同一視し、ないしは連続一体のものと誤って判断したものと推察される。

纏向遺跡からは東海地方を中心に各地域の土器が出土するが、北部九州の土器は殆ど出ない。逆に畿内の土器は吉備、瀬戸内を経て九州に流れており、北部九州に存在していた卑弥呼連合体の東進はなかったものと考えられる。記紀神話の舞台として九州の北西部が殆ど登場しないのは、そのためであろう。大和王権に所縁の深い大社や神社も、松浦、伊都、筑後川下流域周辺にはなく、北部九州でも奴国より西や瀬戸内海側に限られている⁵⁾。この事実もまた、卑弥呼連合体と大和王権の無関係性を示しているといえよう。

●卑弥呼連合体の衰退と瀬戸内海航路の開発

倭国と大陸・半島との交易を独占していた卑弥呼連合体であったが、朝貢していた後漢が滅亡し、自らの後ろ盾を失ってしまった。そのため卑弥呼連合体は、後漢に代わり朝鮮半島を支配下に治めた公孫氏や、その公孫氏を倒した魏にも朝貢を重ね、鉄の分配における特権的地位を維持しようと

図ったが、大陸・半島における相次ぐ王朝の崩壊と政治秩序の混迷は、それまで倭国内部で卑弥呼連合体が確保していた朝鮮半島との交易にかかる特権的地位を危うくさせることになった。逆に、行動の自由を得た北部九州以外の倭国各地のクニは、北部九州の手を経ずに直接鉄を手に入れようと、それぞれ独自に朝鮮半島への進出を企てるようになる。

畿内の勢力が朝鮮半島との交易に乗り出す場合、日本海と瀬戸内海の二つの経路の利用が可能となるが、当時日本海ルートは出雲勢力の支配下にあった。また大和から朝鮮半島に向かうには、陸路を北上して日本海側に出るよりも、河内から直接瀬戸内海に出た方が利便性に優れていた。しかし、瀬戸内海航路を使うには、吉備勢力の協力を取り付けることが絶対不可欠の前提であった。そこで九州から大和に入った勢力は、瀬戸内海の航路を扼す吉備勢力との連携を深めることによって、畿内から瀬戸内海を抜けて半島への進出を試みたものと思われる。

もっとも、大和の勢力が瀬戸内海から朝鮮半島に向かうには、関門海峡を通過しなければならない。これに関して岩橋孝典氏は、非常に説得力のある説を提示している。それまで北部九州の勢力は、半島との往来に留まらず、関門海峡周辺の航路を支配することで、日本海沿岸のみならず瀬戸内海から日本海に抜けようとする大和勢力を抑えていた。こうした制約を強いられていたため、半島との交易にあたって畿内勢力は日本海ルートに依存し続ける必要があったのだ。しかし、北部九州勢力の影響力が低下したことに伴い、吉備と手を結んだ畿内勢力は瀬戸内海から関門海峡を抜けて、出雲に頼ることなく半島に進出することが可能になったとする説だ。

瀬戸内海ルートの掌握によって、それまで依存していた河内、大和から丹後半島や近江に出て日本海を西進する日本海ルートの比重は低下した。こうした海上交通ルートの変化が、越から響灘にかけて広く日本海ルートを扼していた出雲勢力の影響力低下に繋がったものと考えられる。山陰地方の弥生遺跡が大和建国と同じ頃衰退に向かうのも、そのためであろう⁶⁾。

2 大和王権の半島進出

●大和王権の北部九州制圧

3世紀末～4世紀初頭に誕生した大和王権は、その後、着々と四方を攻略し、その勢力を伸長させていった。崇神天皇は大彦命をはじめとする四道将軍を各地に派遣し、西は吉備、出雲、北は丹波、東は越前、美濃、尾張付近までその支配地域を拡大させた。2代あとの景行天皇の御代には、熊襲征伐と九州巡幸、また日本武尊が熊襲征伐と東国平定を行い、さらに統治領域を拡大させたことが記紀に記されている。さらに4世紀も後半になると、大和王権は海を越えて朝鮮半島への進出を企てる。仲哀天皇と神功皇后の事績として、『日本書紀』はこの動きを語り継いでいる。

即ち、仲哀天皇2年2月、天皇と神功皇后は敦賀に向かい、行宮である筥飯宮を立て、日本海航路の支配を確実なものとなす。3月には仲哀天皇だけ南国（南海道）に巡行し、紀伊に赴いたが、ここで南部九州の熊襲が背いた。天皇は穴門（山口県）に向かい、皇后も敦賀から若狭を経て日本海経由で後を追ひ、二人は豊浦津（山口県豊浦）に進出、穴門豊浦宮を建てた。8年春正月、一行が筑紫（九州）に渡ろうとすると、宗像（岡県主の祖）や伊都（伊都県主の祖）が天皇に恭順の意を示し王権に服属したので、仲哀天皇らは関門海峡を越えて北部九州（岡水門）への進駐に成功す

る。伊都の服属は、卑弥呼連合体の事実上の崩壊を意味しよう。

景行天皇の代には果たせなかった北部九州を支配下に治め、大和～朝鮮半島に至る航海ルートの完全制圧に途を開いた仲哀だが、この直後に急死を遂げる。「熊襲の地は不毛だから相手にせず、海の向こうの新羅を討て」との神功皇后に下された神託を信じず、熊襲討伐を強行しようとしたことが死の原因と『日本書記』は記す。仲哀の喪は隠され、屍を豊浦宮に移し、気づかれぬよう火を消して仮葬（もがり）が行われた。そして仲哀を継いだ神功皇后が神託に従い、荷持田村（朝倉市）の羽白熊鷲や山門県（みやま市）の土蜘蛛の女首長・田油津媛を打ち取ったのち、渡海して新羅を攻略したと『日本書記』は記している。

近畿地方に次いで大規模な出現期古墳が見られるのは吉備地方である。それに続いて九州では瀬戸内に面した豊前（国東半島）や北部九州に前方後円墳が登場する。それは、まさに景行天皇や仲哀・神功皇后による北部九州征討のルートと重なっており、畿内から瀬戸内海沿岸を経て玄海灘に至る海上交通路の沿岸地域を大和王権が支配下に治め、広域の政治連合が出現したことを意味している。この航海ルートの獲得によって、朝鮮半島への継続的本格的な進出がはじめて可能となったのである。

●倭国の朝鮮半島進出：倭済軍事同盟の成立

当時的大陸・半島の情勢はどうであったか。大陸においては、3世紀後半に魏が倒れ、かわって西晋が統一したが、西晋も316年に滅び、以後1世紀余にわたる五胡十六国の動乱時代（304～439年）に入った。朝鮮半島では、魏の滅亡により北方の高句麗が台頭、4世紀に入ると、鮮卑族の侵入によって西晋が動揺する間隙をついて、330年頃楽浪・帶方両郡を支配下に収めた。朝鮮半島の南部では、3世紀には馬韓、弁韓、辰韓という小国の連合が形成されたが、4世紀になると馬韓から百済（4C～660年）、辰韓から新羅（4C～935年）が興り、それぞれ国家を形成した。弁韓は統一されることなく、伽耶（伽羅）と呼ばれる小国連合が5～6世紀まで続いた。『日本書記』はこの伽耶（伽羅）諸国やその東の地域を「任那」と呼び、倭国の統治する植民地の如くに記述している。伽耶と倭国の関係が密であったことは疑いないが、伽耶諸国はそれぞれ独立した小国群であったと考えられている。

さて、4世紀後半に入ると高句麗がさらに南進策を進め、新羅や百済、伽耶を圧迫するようになった。その対策として百済は倭国に軍事的支援を求め、見返りに倭国は先進文物の供与をうける二国間の同盟関係が生まれる。鉄資源を確保するため早くから伽耶と密接な関係を持っていた倭国は以後、百済、伽耶とともに高句麗と戦うことになった。七支刀の贈与が示すように⁷⁾、こうした倭済の同盟関係は369年頃から始まった。七支刀は、百済からもたらされた七つの枝がついた特異な形状の刀剣である。「泰和四年」（369年）にはじまる61文字の銘文があり、金で象嵌されている。国宝として奈良県天理市の石上神宮に保存されている。その後、紐余曲折を経ながらも、七世紀に百済が滅亡するまでこの同盟関係は長く続き、古代における日本の対朝鮮半島外交の基軸となる。『隋書倭国伝』の開皇20（600）年に、「新羅・百済は、倭国を大国で珍しい物も多い国として敬仰し、つねに使者を往来させている」とあるが、百済や新羅からみれば倭国は面積・人口ともに大国で、味方につけるにせよ敵に廻すにせよ無視できない存在であったのだ⁸⁾。

● 5 世紀：倭の五王と南宋への朝貢

大和王権が朝鮮半島における覇権闘争に参画、外征を展開するにあたり、盆地の大和から出て瀬戸内海に面した河内平野に進出する必要が高まった。これが、河内王朝の出現となった。大王家は、物部氏、春日氏等を支配下に治めたのに続き、4 世紀末から 5 世紀初、大和盆地南西部を根拠地とし、大和川流域の交通の要地を扼す有力豪族葛城氏との関係を深めることに成功した。大和盆地を拠点とする大和王権の河内への進出を可能となしたのは、葛城氏を取り込むことに成功したためである。

仁徳天皇は葛城襲津彦（そつひこ）の娘盤之媛（いわのひめ）を皇后に立てたが、この盤之媛がのちの履中、反正、允恭の三天皇を産んでいる。また履中天皇が后とした襲津彦の孫黒姫は市辺押盤皇子（いちのへのおしわのみこ）を産み、その皇子は襲津彦の曾孫に当たる菟媛（はえひめ）を后として、のちの顕宗、仁賢の二天皇を産んでいる。さらに、仁徳天皇が后とした葛城円大臣の娘韓姫（からひめ）がのちの清寧天皇を産んだという所伝もある。こうした記紀などの記述が史実かどうかは別にしても、葛城氏が王権の河内進出に関わっていたこと、そして河内王朝と葛城氏が密接な関係にあったことは十分に窺い知れる。

大仙陵古墳（仁徳天皇陵）のある百舌鳥古墳群には、当時、砂州を深く切り込んだ大きな入り江があったと推定されている。つまり、百舌鳥古墳群は、港を背景に建設されたのであり、これらの入江は瀬戸内海から外海を経て朝鮮半島へと至るシーレーンの起点でありゲートウェイであった。大和から大阪平野に進出、瀬戸内海から北部九州、そして朝鮮半島に至るシーレーンを掌握した河内王朝が、朝鮮半島で軍事行動に出た史実を伝えているのが、当時、高句麗の都であった丸都（中国吉林省集安市）で発見された高句麗の広開土王（好太王）の碑文である。

414 年に建立されたこの碑文は、五世紀初頭の倭と高句麗の関係を語る第一級の史料だが、そこには 400 年と 404 年における倭と高句麗の戦闘の状況が生々しく記されている。即ち、新羅・百残は（高句麗の）属民であり、高句麗に朝貢していたが、倭が 391（辛卯）年に海を渡り来て百残・加羅・新羅を破り、臣民となしてしまった。百済は先年の誓いを破って倭と和通した。そこで好太王は 399 年百済を討つため平壤に出向いた。ちょうどそのとき新羅からの使いが、多くの倭人が新羅に侵入し王を倭の臣下としたとして高句麗王の救援を願い出た。新羅の救援を決意した好太王は 400 年新羅に兵を進める。そして新羅城を占拠していた倭国軍を 5 万の高句麗軍が打ち破り、高句麗軍は退却する倭国軍を任那加羅（朝鮮半島の南端、現在の釜山市のあたり）まで追撃しこれを潰滅した（400 年条）。続く 404 年条でも、高句麗領の帶方界まで攻め込んだ倭国軍を高句麗軍が撃退したとある。

苦戦を強いられた倭国軍が半島での戦いを有利に進めるには、倭国の半島支配に対して中国王朝の承認を得る必要があった。そのため、『宋書倭国伝』に讃、珍、濟、興、武と記された倭の五王は相次いで南朝の宋に遣使朝貢し、宋皇帝に高句麗を除く朝鮮南部の軍事支配権を認める称号付与を要請したのである。

3 大和水軍の形成

●シーパワーを支えた海民

日本列島には、縄文期より、漁撈や交易に携わる海の民が存在していた。弥生期に入ると、稲を携え中国の江南地域から朝鮮半島を経由し、あるいは東シナ海を直接乗り越え日本に移り住んだ人々もいた。舟を操り日本列島に広く展開移住し、各地に水田農耕の技術を伝播していったのも彼等海の民達であった。その後、弥生人の多くは平野部に集落を構え、移動性の高い海上での生活を捨て定着性の高い農耕民へと変化していく。もっとも、こうした主潮とは異なり、それまでの漁撈活動を専業とし、また舟を活かしての交易活動にも携わる少数の集団も存在した。

彼らは日常的には多様な漁撈活動を展開する一方で、その行動圏を拡大させ交易の担い手として活躍すると同時に、外洋での航海術を身につけ、航海民としての性格をも併せ持つようになる。それが専門職能集団としての海民（海人）である。対馬海峡を挟んで朝鮮半島と日本列島の双方から出土する朝鮮系無文土器の存在は、彼等の活動の軌跡と行動範囲の広さを語り伝えるものといえる。

3世紀後半、大和地方で大規模な出現期古墳が登場する。吉備地方がこれに続き、さらに北部九州の東側の瀬戸内側（豊前）へと広がっていく。この事実は、先述したように畿内から瀬戸内海沿岸を経て玄海灘に至る海上交通路に添って広域の政治連合が出現したことを意味している。当時の古墳は、列島各地の政治的首長が彼らの構成する政治連合の構成員の死に際して共通の葬送儀礼を行い、ともにその墓を造るといった性格を持っており、構成員のみが大和と同じ形態の古墳の造成が許され、また古墳の規模も各地に首長たちの政治連合における地位の上下や発言権の大きさと密接に関連していたと考えられている。こうした葬送儀礼と墳墓形式の共通化によって同盟の連帯結束と意識の一体化が図られた体制は、前方後円墳体制と呼ばれることがある⁹⁾。西日本全域から東国にまで伸びるこの広域政治体制を物流面で支えていたのが、海民であった。

陸の大部分が深い森林に覆われていた古代においては道路網は未だ発達しておらず、主要な交通路は川や海であり、物資や人の移動、情報伝達には海民が担う水上交通網が極めて重要な役割を帯びていたのである。奈良県桜井市の箸墓古墳に用いられている初期の円筒埴輪は、吉備地方からもたらされたものである。大和や河内の4～5世紀の巨大古墳の石棺は、播磨や讃岐の石材で造られている。さらには九州の阿蘇石を用いて有明海沿岸で造られた石棺もある。また列島各地の古墳の副葬品のうち、三角縁神獣鏡など鏡をはじめとする宝器類は大和や河内の王権から贈られたと推察されるものが多い。こうした物財の広域にわたる移動搬送は、畿内と全国各地を結ぶ海運ルートが存在し、専門集団としての海民が水運による物流活動に従事することによってはじめて可能となったのである。

海民は日本列島全域の海岸及び河川部に広く所在し、それぞれの地域の豪族、有力者（在地首長）に服属していたが、大和王権の支配が広域化するに伴い、各地の海民は在地首長を通して大和王権の支配下に組み込まれるようになる。外洋的な性格を持つ銚（もり）や大型のヤス類は、古墳時代前期の畿内地方の大型前方後円墳に集中しているが、これは畿内政権が海人族を支配していたことを示すものといえる。『日本書紀』応神天皇5年の条に「諸国に令して、海人及び山守部を定む」と記されているが、当初は畿内および瀬戸内海近辺の海民を支配下に治めていただけに過ぎなかつ

た大和王権は、やがて全国の海民を統制するようになっていく。それが「海部」と呼ばれるものである。そして4世紀後半から5世紀にかけて、大和王権が朝鮮半島への進出を活発化させるに伴い、品部の一員たる「海部」として大和政権に掌握される海民集団は、舟による兵員物資の輸送や漕ぎ手の抛出、さらに大和～朝鮮半島に至る航海路の掌握などを司る水軍として、大和王権のシーパワーを支えることになった¹⁰⁾。

北九州市の藍島は、古墳時代は響灘の海民の本拠地で、島の北端には豊富な鉄製漁具を副葬した貝島古墳群がある。同古墳群の6世紀の出土品には、刀剣類や鉄鎌などの武器が伴っていることから、新羅の強大化に伴う朝鮮半島情勢の緊迫化を背景に、当時の海民はたんなる漁撈民ではなく、水軍を構成する軍事的航海民であったことが窺える¹¹⁾。陸上での農耕生活に比べて、海の上での暮らしは危険が多く、また生計の不安定性も高い。それ故、海民は自らの守護神となる海神に対して篤い信仰心を抱いていた。海民には多くの集団、氏族がいたが、王権の統治体制に関与参画を許された有力な氏族は、共通に信仰する海神の視点から、大きく安曇、宗像、住吉の三グループに分類することが出来る。

●安曇

安曇は、筑前国糟屋郡阿曇郷（福岡市東部）を拠点とする漁撈集団であった。阿曇（あづみ）は「アマツミ」つまり「海人津見」の転訛とされ、「津見」は住みの意ともいわれる。名実共に「海人」を代表する氏族で、一族の祭神は綿津見（ワタツミあるいはワダツミ）（小童とも書く）である。「ワタ」は海の新語で、「ツ」は「の」、「ミ」は神霊の意と解釈する説によれば、「ワタツミ」は「海の神霊」という意味になる。海の神様である綿津見神は、山の神である山祇の神と対になっている。安曇氏発祥の地といわれ、「倭奴国王」の金印出土でも知られる北九州・志賀島（福岡市東区、旧粕屋郡）にある志賀海神社には、綿津見三神が祀られている。綿津見神を祀る古社が志賀島から対馬にかけて集中しており、安曇氏の統率下にあった海人が朝鮮海峡を活動の拠点としていたことが窺える。

『古事記』及び『日本書紀』（一書の六）によれば、綿津見神はイザナギの神が黄泉の国から逃げ帰り、橘の小門の阿波岐原でみそぎをした時に生まれた神とされる。つまり、アマテラスよりも先に登場する神である。この時、水の底の方に潜った時に生まれたのが底津綿津見神・底筒之男命、中ほどにいた時生まれたのが中津綿津見神・中筒之男命、水の表面で生まれたのが上津綿津見神・上筒之男命で、底津綿津見神・中津綿津見神・上津綿津見神が綿津見の神三神で、一方の底筒之男命・中筒之男命・上筒之男命の三神は住吉の神とされる。

安曇氏は九州から瀬戸内海、近畿を経て東日本にも広く展開し、移住先には安曇が語源とされる地名（阿曇・安曇・安積・厚海・渥美・阿積・泉・熱海・飽海など）が多く残されている。三河国の渥美郡（渥美半島、古名は飽海郡）や飽海川（あくみがわ、豊川の古名）、伊豆半島の熱海もその一例だ。最北端となる飽海郡（あくみぐん）は出羽国北部（山形県）に達している。志賀や滋賀を志賀島由来の地名として、安曇族との関連を指摘する説もある。一部は河川をたどり内陸部にも進出し安曇野の名を残している。奥穂高岳山頂に嶺宮のある穂高神社はこの地の安曇氏が祖神を祀った古社で、中殿（主祭神）に「穂高見命」、左殿に「綿津見命」など海神を祀っている。内陸にあるにもかかわらず、例大祭（御船神事）には、大きな船形の山車が登場する。

『日本書紀』によれば、安曇氏は応神朝で「海人の宗に任じられ」（応神3年）、海人族（海部＝あまべ）を統括することになった¹²⁾。後に海人族の統率権は大海（凡海）氏に移されたが、大海氏は安曇氏から分かれた同族である。安曇氏は、安曇連として連姓を与えられており、海人族の中でも高いステータスを持つ氏族であったが、中央政界で存在感を高めることはなかった。それには一つの事件がかかわっていたとされる。

仁徳天皇が亡くなり、まだ皇太子（履中）が即位しない時、皇弟住吉仲皇子がクーデターを決行し、安曇連浜子をして大和へ逃れる皇太子を追撃させようとして失敗する事件が起きた。浜子が仲皇子と結んだのは、住吉と阿曇がいずれも難波の地が地縁的に親しかったことが、この事件の背景にあったと思われる。とすれば、阿曇氏はかなり早い頃に本拠を北部九州から難波に移して中央政界に接近し、海人の宰領としての地位を高めようと謀ったものであろう。天皇への贅の貢上を梃子に勢力伸張をはかる阿曇氏にとって、天皇所在地に近い沿岸地域に本拠を移すことは必要不可欠であった。住吉仲皇子は、その名から知られるように難波の住吉に囚縁をもつ皇子であり、難波の阿曇江のあたりに居を定める安曇氏とは接触する機会も多かったはずだ。安曇氏は王位継承に関与するまでにその勢力を伸ばしたものの、結局皇子は討たれ、浜子自身は捕えられて降伏し、中央政界雄飛の夢は消えた¹³⁾。以後、天皇を中心とする国家体制が整うなか、安曇氏は阿倍臣氏の同族膳臣と並んで天皇への供御を司る大膳職（おおかしわでのつかさ）の役割（神事奉膳、即ち海産物を用いた膳を公的な催事で貢進すること）を代々担い、伴造氏族として大和政権における中流貴族の地位が固まっていく。

●宗像

宗像は、現在の福岡県宗像市辺りに本拠を置いた氏族である。漁労に従事する海民の多くは刺青を入れていたが、胸の刺青である胸型がムナカタに転じたのであろう。宗像は、天照大神と素戔鳴尊（スサノオノミコト）の誓約（うけひ）によってスサノオから生まれた田心姫（タコリヒメ）、湍津姫（タギツヒメ）、市杵島姫（イツキシマヒメ）の三女神を祭神とする（女神の名や祭られた宮は記紀の記述箇所により多少異なっている）。これは、海神としては綿津見三神が宗像三神より起源が古い（大王家との関係が強い）ことを示している。

他方、宗像氏は、出雲勢力との関係が深い¹⁴⁾。宗像三女神はスサノオの剣から誕生しており、『古事記』では、タキリヒメ（タコリヒメ）はスサノオの子孫大国主神と結婚している。タキリヒメは、スサノオの子孫であると同時に、スサノオの神裔の大国主神（オオクニヌシノミコト）の後神であり、二重に出雲系の神と結びついている。オオクニヌシとタキリヒメとの間の婚姻関係を、出雲と宗像との強い政治的な繋がりとの反映とみることもできよう。国譲りの際、オオクニヌシの二男タケミナカタは抵抗を続け出雲を脱して諏訪湖まで逃げるが、ここに幽閉されることを条件に許され、諏訪大社の神となる。「タケ」は「武」の味、ミナカタはムナカタが転じたもので、タケミナカタとは、武力のある宗像の神という意味になる。この神話から、海の民ムナカタが日本海を九州から北陸へ流れる対馬海流に乗って、西は九州、東は越後まで進出していたことが窺え、その範囲は出雲勢力の展開範囲と重なる。

宗像氏の本拠である遠賀川流域の立屋敷（水巻町）から出土した弥生前期の土器は、遠賀式土器と呼ばれる。その出土分布をみると、早くも紀元前2世紀には南は薩南諸島の一部、東は伊勢湾沿

岸と丹後半島を結ぶ線まで広がっている。遠賀式土器の広範な拡散は、航海民としての宗像の活動の軌跡ともいえよう。『先代旧事本紀』によれば、遠賀川流域を中心にして宗像以東の九州北部は物部氏の本貫地としており、宗像氏は出雲だけでなく、物部氏とも結びついていたと考えられる。

後に出雲勢力が衰退し、物部氏が大王家に服す時代になると、宗像も大和王権に服属する。『日本書紀』によれば、仲哀天皇の一行が穴門の豊浦に入ると、崗県主の祖、熊鰐が周防の沙廳（さば）に天皇を迎え、白銅鏡、十指剣、八尺瓊を捧げて帰順したとある。この崗県主の祖が宗像氏である。その後、天皇は熊鰐の先導で岡水門にいたった。岡水門付近を抑えていた宗像の帰順によって、仲哀天皇らは関門海峡を通過することができたのであろう¹⁵⁾。

4世紀後半以降、大和王権が朝鮮半島への進出を開始するにあたり、日朝航路の掌握とその安全確保が大きな課題となる。それに伴い、響灘から玄界灘に至る海域を支配していた海民宗像の存在感が俄に高まった。そして宗像族は、大和王権の半島進出の際の水先案内人の役目を担うようになったのである。記紀によれば、天照大神と素戔鳴尊の誓約により生まれた宗像三女神を筑紫洲に降臨させ、「海の北の道の中」に在るようにしたという。イチキシマヒメは沖ノ島の沖津宮に、タゴリヒメは大島の中津宮に、タギツヒメは田島の辺津宮（宗像大社）に、それぞれ祭られた。『日本書紀』の一書には、アマテラスが「汝三神、道の中に降りて居して天孫を助け奉りて、天孫の為に祭られよ」との神勅を授けたと記されている。それゆえに三女神は「道主貴（みちぬしのむち）」とも呼ばれる。道をつかさどる神の意味だ。「道の中」とは「海北道中」つまり、北九州と韓半島・中国大陆を結ぶ海上の道であり¹⁶⁾、そこに降りて、「歴代の天皇をお助けし、歴代の天皇からお祭りを受けられよ」としたのである。かくて筑紫の地方海民である宗像族の祭祀に大和王権が関与し、宗像の海神は国家の航海神へと昇格された。この経緯を象徴するのが沖ノ島である。

沖の島（福岡県宗像市）は九州の沖合 60 キロ、九州と朝鮮半島の間位置する玄界灘に浮かぶ絶海の孤島である。周囲わずか 4 キロほど、宗像大社の私有地で、原始の森の中にタゴリヒメを祀る同社の沖津（おきつ）宮が鎮座する。太平洋戦争中、島に砲台が築かれるなどしたものの、いまでも神職 1 人が 10 日交代で常駐するのみ。特別な場合をのぞき沖ノ島への一般の上陸は許されていない¹⁷⁾。

沖ノ島は古くから周辺の海民や航海者の信仰の場となっていたが、4世紀後半以降は、畿内の大和王権の直接祭祀を受けていたことが戦後の調査で分かった。沖の島の第 1 次発掘調査が 1954 年に行われ、その後、1971 年までの 18 年、3 次、10 回に及ぶ学術調査で、島の中腹に 4 世紀後半から九世紀までの祭祀遺跡 23 ヲ所が確認され、大古墳の副葬品に匹敵する 70 枚以上の青銅鏡や銅剣、玉などが発掘された。そして、祭祀の形式が、①巨岩上の祭祀（4 世紀後半～5 世紀）→②岩陰での祭祀（5 世紀後半～7 世紀）→③半岩陰・半露天での祭祀（7 世紀後半～8 世紀前半）→④露天での祭祀（8 世紀～10 世紀初頭）と四段階で推移してきたことが判明した。

これら四段階の変遷は、大和王権の韓半島派兵に始まり、倭五王の中国通交、半島の戦乱と百濟滅亡、律令時代の遣隋使・遣唐使外交とその終焉を背景とするものである。その間、大和王権が主宰し、宗像氏が司祭者として祭りを行ってきたのである。祭祀遺跡からは、ササン朝ペルシアで生産されたカットグラス碗の破片や唐三彩の長頸瓶など豪華な奉納品が出土し、「海の正倉院」と呼ばれている。なぜそのような手厚い祭祀を受けたかといえ、いうまでもなく朝鮮半島へ渡る航路の安全祈願のためである。4 世紀後半以降の倭国にとって、この海域の交通の安全は、政権の死活

を制するともいえるほどの重要性をもっていたのだ。卑弥呼の時代には、宗像より西・南方に位置した奴国や伊都国が、朝鮮半島および大陸との交易の実権を握っており、宗像は主たる交易路からは外れていた。しかし、大和王権が北部九州に進出するにおよび、朝鮮半島に至る航路を確保する過程で宗像族を取り込み、その協力を得ていったのである。

ところで、『日本書紀』一書の三に、宗像の「三柱の女神を、葦原中国の宇佐嶋に降らせた」とあり、宗像三女神は、全国八幡宮の総本社で応神天皇や神功皇后を祀る宇佐神宮においては、比売大神として二の御殿に祀られている。宇佐神宮は国東半島の付け根の宇佐にある。この地は瀬戸内を通り畿内に向かうときの入り口であると同時に、畿内から九州に入る玄関口でもある。九州最古の前方後円墳といわれる赤塚古墳が近くに所在しており、水上交通を媒介として早くから大和王権と深い関係を維持していた地域である。大和王権は筑紫とともに周防灘に面したこの地を朝鮮半島との交易路を守り、同時に九州島を軍事的に押さえるための拠点として重要視していたのだ。八幡の「幡」も綿津見の「綿」も、韓国語の「海」(ワタ)に由来するとの説もあるが、仮に宇佐の首長が宗像から移住してきたとすれば、宇佐で力を持っていた新羅系渡来民の秦氏との関係も指摘できよう。秦氏は、蘇我氏の強力な支持集団であった。

さらに宇佐の比売大神を推古朝期に安芸国(広島県)宮島に勧請したのが厳島神社だと伝えられている。イチキシマヒメまたは「市杵島(いちきしま)」が、「いつくしま」の由来とされる。厳島神社の祭神も宗像大社の三女神と同じだ。厳島神社は、推古天皇元年(593年)に「宗像三神」がこの地の豪族佐伯鞍職(さえきのくらもと)に「宗像大明神」を崇敬せよと神託したことをその起源としている。

天武朝が八色姓を定めた時、宗像氏には八色姓の中で第2位にあたる朝臣の姓が与えられている。石川(蘇我)氏、物部氏、中臣氏、阿倍氏らが朝臣のカバネを授かり、大伴氏や阿曇氏は朝臣のすぐ下の宿禰のカバネを賜ったことからみれば、朝廷が宗像氏を優遇していた様が窺える。しかし、宗像族が中央政界に足跡を残すのは、天武天皇が胸形徳善の娘の尼子娘を娶って高市皇子を産ませたという史例しかない。7世紀に大和王権が朝鮮半島から後退したことにより、沖ノ島の祭祀遺跡の数は急減する。さらに遣唐使が派遣されなくなるに伴い、沖ノ島の祭祀も行なわれなくなった。朝廷が公式の外交を行なわなくなることに伴い、宗像は再び地方の一豪族として生き続けていくことになった¹⁸⁾。小説『海賊と呼ばれた男』のモデルとなった出光佐三は、明治18(1886)年福岡県宗像の赤間町(現宗像市)の出身である。戦前から世界を股にかけ、石油エンジニアや海運実業家として活躍、さらに出光興産の創業者となる。佐三は故郷県宗像にある宗像大社を厚く信仰していたが、海民として列島の外に雄飛した宗像族の精神は、確として後の世に受け継がれているといえよう。

●住吉

住吉の社は、イザナギノミコトが黄泉の国から逃げ帰って身についた穢れを払う為に禊ぎ祓いをした時に、安曇族の祖神である綿津見三神(上綿津見神、中綿津見神、下綿津見神)と同時に生まれた表筒男神、中筒男神、底筒男神(ウワツツノオ・ナカツツノオ・ソコツツノオ)の三海神を祭神とする。化生を同じくすることから、住吉と安曇は系譜上の関係が深い。これは海の守護神と航海の守護神を並立させたものと解釈したい。またいわゆる海幸山幸神話のなかで、山幸彦のヒコ

ホホデミが海宮にわたり海神の娘トヨタマヒメと出会う際に手助けし、また東方に良き土地があることを彼に教え、東征を決意するきっかけを作るなど大王家の創生に大きな影響力を及ぼした塩土老翁は、この住吉三神（底・中・表の筒男命）と同一神とされている¹⁹⁾。

住吉と言え、神功皇后の新羅遠征時の守護神としてよく知られている。仲哀天皇に新羅征討の神託を下し、また神託を信じず亡くなった仲哀に代わり神功皇后が進めた新羅攻撃を勝利に導いた神として名高い。凱旋した神功皇后は、神意に謝して住吉三神の荒魂を穴門の山田（長門住吉神社）に、また和魂を大津の淳中倉の長峽（摂津住吉大社）に祀ったと『日本書記』は伝える。住吉神社は、この山口県下関市の住吉神社（通称一宮）と大阪住吉区の住吉大社、それに福岡市博多区の住吉神社を三大住吉としている。博多の住吉神社は那の津にある。現在は博多駅に近い内陸部に位置するが、元々は深く湾入した冷泉の津の南岸、那珂川が流入するところに鎮座していた。住吉神が最初に示現したのは筑紫であり、古書などによれば博多の住吉神社が「住吉本宮」、あるいは「日本第一住吉大明神」とあるが、現在では和魂を祀ったとされる大阪の住吉大社が全国の住吉神社の総本宮とされている。

記紀の記述では、神功皇后の三韓征伐では住吉神が神功皇后を助け、新羅を平定して無事帰還させたとある。こうした経緯から、全国の住吉神社には住吉三神とともに神功皇后が祀られていることが多い。大阪の住吉大社には四つの社があり、それぞれ「表筒男神」「中筒男神」「底筒男神」そして「息長帯比売命」すなわち神功皇后が祀られている。住吉神が海外進出に積極的になった時期の大和王権と関わりの深い海神であることがわかる。『延喜式神名帳』に記載がある住吉七社のうち、陸奥（いわき市）の住吉を除いた六社は、摂津（大阪）、播磨（加古川）、長門（下関）、筑前（博多）、壱岐、対馬と点在し、東シナ海から大和朝廷まで 一本の航路沿いの要所々々に鎮座している。住吉神が難波から朝鮮半島に至る重要な港湾の管理や海運統制、それにシーレーンの安全確保を担う神であったことが窺える。「筒之三神」の「ツツ」とは、津と津をつなぐこと あるいは 連ねることに由来した名であろう。ツツは同じく海神の塩土老翁のツツにも通じ、両者は本来同一で、三柱で祀られる住吉神が一神の時には塩土老人翁と呼ばれるとする説もある。

かように、国家色の強い神であることと裏腹に、氏族集団としての住吉の存在感は非常に薄い。綿津見三神と一体として誕生したと記紀にあることから、安曇族と近い関係にあるとも考えられるが、住吉三神の祭祀氏族は不明である。大阪の住吉大社は、神功皇后が新羅征討を果たし七道の浜に帰還したときに、摂津国住吉郡の豪族の田蓑宿禰が航海の安全に感謝して住吉三神をこの地に祀ったことをもってその創建の由来とし、歴代宮司の津守氏は地元摂津の豪族田蓑宿禰の子孫と言われる。津守氏は、筑紫の安曇氏との血縁関係はなく、住吉三神を祖神と仰ぐ一族の末裔でもない。また博多の住吉は佐伯氏、長門の住吉は穴門氏で、社家は津守氏と別系統である。各地の港（津）を守る男神（筒男神。綿津見神は女神であるとする）を祀るため地域ごとに朝廷により氏族が配置されたが、その中で摂津の津守氏が国家祭祀を行う住吉大社宮司として力を持つようになったと推察される。

つまり住吉は、特定の海民集団の祀る氏族神をその起源とするのではなく、外征や海事海運政策を進める際の国家守護の神として大和王権が祀り、育んだものと考えたい。住吉の社に課せられた役割は、海民一族の繁栄や安全ではなく、公的な船舶の航海の無事を祈ることにあった。遣唐使が派遣された時代にも住吉神は重要視され、遣唐使船には住吉三神を祀った祠が安置され、「主神」

とよばれる大社の神職も乗船していた。住吉神の性格を示す史例といえよう²⁰⁾。

以上、取り上げた三つの海民及び海神を比較するならば、次のように纏めることができよう。まず安曇は、南九州を拠点とした南島系海民隼人との関係も指摘されるように、古くから皇室との関係が深い（神武天皇の母はワタツミ神の娘）。元来アツミ＝ワタツミは、漁撈から航海の安全まで広く海全般を司る神であったが、のちに役割分担が進み、航海神の役割は宗像神や大和王権が庇護した住吉神が担うようになり、安曇は漁撈や航海に従事する航海民、海民たちの神としての性格を強めていった。海部の統制という役回りを司ったのはそのためであろう。海民たちの神として、漁業や海産物の神としての性格も強めていったと思われる。海民集団を守護する安曇の神に対し、宗像と住吉は、大和王権が海外に進出する過程で重要視された航海の安全に関わる海神（航海守護神）である。

宗像は、北九州を拠点とする地方豪族で、元々は出雲や物部との関係が深い勢力であったが、九州に進出した大和王権が4世紀後半以降、積極的に朝鮮半島に進出するようになる過程で、日本海航路及び九州と朝鮮半島の往来、つまり外洋航海の安全を司る神として朝廷が重視し、地方神を国家神として取り込んでいった海神である。

これに対し住吉は、いわば外様の出自を持つ宗像に対して、大和王権自らが作り出した国家神的性格の非常に強い海神であり、日本全域（特に瀬戸内海と太平洋岸）及び難波から朝鮮半島に至るシーレーンや各地の港湾・航路の管理安全を担った。国家海運統制の神ともいえよう²¹⁾。

●大倭氏・尾張氏

海民に属す氏族には、このほか大倭（倭直）氏がいる。速吸門（豊予海峡）で東征する神武一行に出会い、その水先案内人を務めた珍彦（『日本書紀』ではウズヒコ、『古事記』では槁根津彦、サオネツヒコ）を祖とする。ウズヒコは『日本書紀』では倭直らの始祖、『古事記』では槁根津彦を大倭国造の祖としている。豊後を出自、根拠地とする海民とされ、倭直は仁徳朝でも造船や航海の専門家として描かれている²²⁾。

ウズヒコの子孫で倭直の祖長尾市は倭大国魂神の祭主となるが、倭大国魂神を祀るのが奈良県天理市の大和神社で、歴代大倭氏が祭祀を担当した。ウズヒコにちなんで、遣唐使が派遣される度に、大和神社に出向いて航海の安全が祈願された。太平洋戦争中は、戦艦大和の守護神とされた。戦死した英霊を合祀し、戦艦大和が沈没した4月7日には慰霊祭が行われている²³⁾。

一方、大和王権の東方進出の主役を担った海民氏族に尾張氏がいた。4～5世紀の大和王権の東国進出は、東山道と東海道の二つのルートで実施された。東海道では、磐余・磯城の地から陸路で伊賀・鈴鹿（三重県西部）を越えて尾張（愛知県西部）に向かうか、櫛田川を河口まで下って伊勢から舟で渥美半島の先端三河に渡り、駿河を経て南関東に進出する「海つ路」をとって東海道沿いに東国に進出した。後者の海路を採る方が最短で早かった。海路で東国に渡る際の交通の要衝が伊勢であり、伊勢湾の水軍を率いていたのが、現在の愛知県付近を支配地とする尾張氏だった。²⁴⁾

尾張氏は、元は葛城高尾張（奈良県御所市）の出で、物部氏の同族とされる。尾張氏・物部氏の古い系譜を伝える『先代旧事本紀』は、尾張氏の祖先の高倉下を物部氏の祖先、宇麻志麻治命の兄とする。尾張氏の別姓は「海部」で、尾張の地には海部郡がある。尾張氏が祭った熱田神宮は、海部郡の東方に位置している。京都府宮園の籠神社（京都府宮津市）の社家海部氏も同族である。尾

張氏が東海地方の水上交通を掌握したことで、大和王権の勢力は関東、さらには東北へと伸びていった。

このほか、近江水系を支配したのが息長氏だ。琵琶湖の湖東、湖北を中心に活躍、本貫地は滋賀県坂田郡の近江町、米原付近といわれる。琵琶湖を含めた日本海側の海上交通、交易を支配していた。息長は「息が長い」で元は漁撈潜水を得意とした海民であったと思われるが、息長はオキ（隠岐）ナガ、イキ（壱岐）ナガに通じる、あるいは、息が長いことから鍛冶、製鉄の神ともされるが定かではない。息長氏の祖は応神天皇5世の孫にあたる息長真手王といわれるが、『古事記』では、その祖父で応神天皇の孫の意富々杼王（オオオド）とする。開化天皇の子である日子坐王の妃は息長水比売で、日子坐王の曾孫にあたる息長宿禰王の娘が息長帯比売命、即ち神功皇后である。息長氏は王権の政治の表舞台に出ることはあまりなかったが、和爾氏などと同様、天皇家に妃を送り出す形で王権を支えた氏族であった。

●瀬戸内海の制海権を握る水軍氏族

大和王権がその勢力を朝鮮半島に広げるためには、大和から朝鮮半島南部に至るシーレーンの確保が不可欠であったが、その中でも最長の航路が瀬戸内海であった。瀬戸内海は冬の日本海ほどには海が荒れないものの、航海の難所であった。そもそも瀬戸内海には数多くの狭湊な海峡が要所々々に存在する。また汐の干満による潮位の高低差で1日に2回東西逆方向に強い流れが生じ、最強時の流速は特定の場所では10ノットを超えることもある。さらには、通過する船にとって障害物となる水面下の岩礁も随所に存在するなど漕ぎ船にとっては厄介な海である。そのため、瀬戸内海の複雑な地形や海象に通じた海民の協力がなければ、安全な航海など覚束ない。神武東征の際、一行が椎根津彦に水先案内を求めたと記紀は伝えるが、海民族の協力なくして瀬戸内海の航行が不可能なことを物語る説話である。

古代における瀬戸内海航路は、大別して二つのルートがあった。一つは四国側を讃岐沖から備後灘を通り来島瀬戸を経て西進するもの、もう一つは吉備を経由して中国地方沿岸を進むもので、両者は周防の熊毛郡沖で合したとされる。この南北二つのルートを掌握していたのが紀氏と吉備氏だった。四国側が紀氏、中国地方のルートを吉備氏が扼していた。両氏とも海民との関わりは古く、領地内に所在する多くの海民を統率し、水軍を率いる軍事指導者として活躍した有力氏族であった。

このうち紀氏は、記紀では天道根命（あめのみちねのみこと）を祖とする神別氏族で、宇遲彦命の時に紀国造（紀直）に任じられたとされる。また葛城氏、蘇我氏、巨勢氏、平群氏などの有力豪族と同様に武内宿禰を祖に持つ紀臣は、大和国平群県紀里（現在の奈良県生駒郡平群町上庄付近）が本拠であったが、紀ノ川流域を中心とする紀伊半島が本貫地となった。大和川と並んで、瀬戸内海から紀ノ川を溯って大和に入るルートも大和と朝鮮を結ぶ重要な幹線で、紀ノ川の河口を押さえる紀氏の存在は無視できないものがあつた。また紀伊の国とは木の国の意で、クスが産する造船の適地でもあつた。

紀氏や坂本臣等その同族は本貫地の紀州から瀬戸内海の四国沿岸に広く拡大分布し、それら地域の海人集団をその支配下に治めていた²⁵⁾。水軍や造船と深い関わりを持っていた紀氏は4世紀半ば以降、大和王権が朝鮮半島に積極的に進出するようになったことに伴い、その存在感を高めていった。船の建造・調達や朝鮮半島に大量の兵員・物資を送り込むためには、海人や造船の地を掌握

していた紀氏の協力が不可欠であったからだ。紀氏一族が水軍の主力を構成し、王権による朝鮮への派兵や半島の経営に関わっていたことは、例えば、紀角宿禰が百済に遣わされ（仁徳41年紀）、新羅征討の大將軍に紀小弓宿禰が任じられ（雄略9年）、新羅が任那宮家を討ち滅ぼしたため、その回復に大將軍紀男麻呂宿禰が派遣された（欽明23年）記述などから読み取ることができる²⁶⁾。

後に大化の改新による律令制の施行で諸国の国造が廃止されたが、出雲国造と紀伊国造だけはその後形式上は国造に任じられた。だが、紀氏の実際の管掌は神事のみとされ、その政治的影響力は衰えていった。紀氏の末裔である紀貫之が、赴任先の土佐から京に戻る際、海賊の襲撃に怯えたことが『土佐日記』に出てくるが、時の流れを感じさせるエピソードである²⁷⁾。

瀬戸内海の南、四国が紀氏の勢力圏とすれば、北の対岸、中国地方の海民を総べていたのが吉備氏だ。大和と九州を結ぶ古代日本の大動脈である瀬戸内海の中央に位置し、海上交通の要衝であった吉備には、淡路と並んで海民が多く住んでおり、彼らを支配する吉備氏も大和から重要視された。吉備氏は、吉備国（備前、備中、備後）平定のために朝廷が送った孝霊天皇の子吉備津彦を祖とすると言われるが、異説も多い。吉備一族は密接な婚姻関係を通じて大王家と同盟関係を築き、大和王権の派兵や海外遠征で重要な役割を果たし、列島内部で大王家に匹敵する政治的地位を占めるようになる。紀氏と同様、半島での活躍の記録が『日本書紀』に残されている。例えば雄略紀には、高句麗の攻撃を受けた新羅救援のために任那日本府から吉備臣小梨らが派遣されたことや、吉備上臣田狭が任那国司に任じられ、その弟の弟君は百済に拠ったとされる。敏達、欽明朝にも吉備氏の半島での活動が記されている。

●吉備・葛城氏の衰退と大和王権によるシーレーン支配体制の強化

「真金吹く吉備」と枕詞に詠われるように、吉備は古来「製鉄」の地として栄え、製塩も盛んであった。しかも瀬戸内海の海上交通権を掌握することで実力を増していく吉備は、大和王権にとってそれまでの盟友から次第に警戒すべき脅威の対象へと変化していった。吉備が大和と同程度の強大な権力を誇っていたことは、築造当時の日本列島で最大級の規模を持つ造山古墳や作山古墳の存在からも明らかである。作山古墳は現存する日本の古墳のうち第9位、さらに造山古墳は、墳長350メートルの巨大な前方後円墳で、大阪府堺市の大仙古墳、同羽曳野市の誉田御廟山古墳、同堺市百舌鳥陵山古墳に次ぐ全国第4位の規模を誇っている。両古墳の存在は、吉備地方の繁栄とこの地の豪族の力の大きさを如実に示すものである。当時、大和から大阪平野に進出を果たした大和王権（河内王朝）に匹敵する権勢を吉備は保持していたのである。

吉備の台頭を警戒する大和王権は、その力を削ごうと動く。そうした政治情勢を伝えるのが、記紀に表れる吉備の首長反乱伝承である。『日本書紀』は雄略紀から清寧紀にかけて、吉備氏による三つの大王家に対する不敬や反乱の伝承を取り上げている。第一は、雄略紀7年8月、吉備下道臣前津屋（きびのしもみちのおみさきつや）が大王に対する不敬行為を理由に雄略天皇によって誅殺される事件、第二が同じく雄略7年に吉備上道臣田狭（きびのかみつみちのおみたさ）が任那で大王に反逆する事件である。吉備上道臣田狭の妻吉備稚媛（きびのわかひめ）が非常な美人と聞いた雄略天皇が、田狭を任那国司に追いやり稚媛を奪ったため、派遣先の任那でこれを知った田狭は怒って新羅と同盟し王家に反逆したというものだ。これも雄略天皇が鎮定している（ともに463年）。第三は清寧即位前紀の吉備稚媛とその子星川皇子による皇位篡奪の謀反に吉備上道臣が支援しよう

とした説話で、清寧天皇が鎮圧している（479年）²⁸⁾。

吉備の反乱は、大和王権によって阻止され失敗に終わった。事件の真偽はともかく、一連の伝承は、5世紀後半、大王家を脅かすほどに力を増しつつあった吉備勢力を抑え込み、大和王権が瀬戸内海の航海権を直接掌握したことを物語っている。これ以後、この地方で造山、作山に匹敵するほどの巨大古墳が築かれることはなく、5世紀半ば以降、吉備は衰退に向かう。一方、大和王権はその後、児島に屯倉を設置し、瀬戸内海の航海権を直接統べる体制を構築していくのである²⁹⁾。

この吉備勢力と深く結びついていたのが、葛城氏であった。『日本書紀』雄略7年条の分注は、吉備臣田狭の妻が葛城襲津彦の孫・玉田宿禰の女としている。大和盆地の南東部を拠点とする大王家は、河内、瀬戸内海へのアクセスでは地理的なハンディを負っていた。そのため、盆地南西部を支配し、河内、瀬戸内海へのルートを扼していた葛城氏との姻族関係を強めるなどして協力関係の確保に努めたことは既述した。仁徳～仁賢に至る9人の天皇のうち、安康天皇を除いた8代の天皇が葛城氏の娘を后妃か母としている。

葛城氏は、大和川水系の支配を通して本貫地の高い戦略的価値を誇示していただけではない。葛城氏は大王家との間だけでなく、紀氏や吉備氏、さらに尾張氏、息長氏等他の有力な水軍氏族とも姻族関係や連携交流を重ね、西日本の主要な河川、海上交通網を広く掌握していた³⁰⁾。4～5世紀にかけて、各地の有力な水軍氏族を束ねる葛城氏の力は大王家に匹敵するもので、物流網の支配に留まらず、大和王権の外交政策においても大きな発言力を保持していたと思われる。当時の大和権が「大王と葛城氏の両頭政権」とも称される所以である。

その葛城氏と瀬戸内海航路を押さえる吉備氏が政治的に結びつき、さらには百済とも連携して対高句麗戦の主導権を握り、大王家の朝鮮半島政策に抵抗し、あるいは牽制を加える事態は大和王権にとって脅威であり、容認するわけにはいかなかった。それゆえ、反乱鎮圧という形で吉備討伐を行ったのと同じ頃、王権は葛城氏を滅亡に追い込んだのである。即ち、允恭天皇5年、允恭天皇は殯宮責任者としての責務を果たさなかったとして、葛城玉田宿禰を殺害した（416年）。また安康天皇3年、大泊瀬皇子（のちの雄略天皇）は安康天皇殺害の仇を討つという大義名分を掲げ葛城円大臣と眉輪王を焼き殺している（456年）。

吉備、葛城の掃討により、大王家は対外交渉権を自らの手に一元化するとともに、シーレーンに対する統制と支配をより強固なものとすることに成功した。その史実を間接的に伝えるのが、吉備の反乱や葛城氏征伐の伝承である。大王を中心とする集権化を進めた大和王権は、以後、それまで以上に朝鮮半島問題に深くかわかり、水軍を導入して半島への兵力投入を繰り返すことになる。

ちなみに、大和盆地南西部の葛城氏の地盤を引き継いだのが蘇我氏である。海に通じる地の利を活かし、多くの渡来人集団を取り込んだ蘇我氏は、外来の先進技術や文化を真っ先に吸収し、財務や行政に手腕を発揮する。本来、軍事や水運を司る氏族ではないが、王権内部で台頭を遂げ、葛城氏と同様、対外交渉や朝鮮半島政策でも大きな影響力を発揮するようになるが、それが大王家との路線対立を招き、中大兄皇子らによる政変で衰退するのは、7世紀のことである。

ところで、宇佐、伊勢、住吉、熱田、出雲、宗像など大和王権に関わりの深い神宮・大社の多くは、海民の活動拠点に位置している。これは、水上交通や半島経営における航路の安全確保から水軍の育成などシーパワーの重要性が認識されていたことの反映であろう。古代、律令制の下で、一郡すべてが特定の神社の所領、神域とされる「神郡」の制度が存在した。神郡制度は、天武天皇に

よる律令制定を命ずる詔の発令（681年）を受け701年に完成した大宝律令によるものと考えられるが、神郡の文献初見は、『日本書紀』の持統天皇6年（692年）なので、神郡の制定は天武天皇（686年崩御）の存命中に行われたと思われる。『令集解』所収「養老7年（723年）太政官処分」で、全国に八つの神郡（筑前国宗形郡・伊勢国渡相郡・伊勢国竹郡・安房国安房郡・出雲国意宇郡・常陸国鹿島郡・下総国香取郡・紀伊国名草郡）を確認することができる。この8神郡は全て航海の重要拠点にあたる。つまり、大和王権はシーレーンの重要拠点を確保するとともに航海の安全を図るために、海民の神に特別扱いをしていたのである。

●古墳時代の舟

この時代になると、古墳の石室内や横穴の壁面に、船を描いた彩色画と線刻画が数多く見出される。たとえば福岡県浮羽郡吉井町珍敷塚古墳、熊本県山鹿市弁慶ヶ穴古墳、福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳などにその好例を見ることができる。それらのほとんどが凹字形に表現されており、弥生時代の舟と同様に、前後が著しく高く造られたものであった。船首と船尾がせりあがっているのは、大きな波を乗り越えられるよういするための工夫である。奈良県天理市に所在する4世紀初頭の前方後円墳である東殿塚古墳から出土した円筒形埴輪には、前後がせりあがったゴンドラ型の船が描かれている。7本の櫂を描いていることから、14人で漕ぐ大型船であり、幡ないしは帆に風邪を受けて海上を疾走する様子が描かれている。兵庫県出石町の袴狭遺跡で1989年に出土した木製品の中から、船団とみられる15隻の準構造船を杉板に描いた線刻画が見つまっている。杉板は地層と一緒に出土した土器などから、古墳時代前期（4世紀初頭）のものと考えられる。

埴輪の舟も多数出土している。特に有名なのが宮崎県西都市西都原古墳群出土の舟、（全長101cm、幅19cm、高さ39cm）で、5世紀初頭築造の男狭穂塚・女狭穂塚古墳の陪塚（170号墳）から大正時代初期に出土した。これも壁画と同様に、両端が高くせり上がったゴンドラの形態をしている。舷の上縁に左右6対の突起が並列しているのは、櫂の支点と考えられ、この頃からオールを用いるようになったことが窺える³¹⁾。1988年には大阪市平野区長吉長原の高廻り2号墳（5世紀前半）の周濠から、大型の船型埴輪（全長128.5cm、幅26.5cm、高さ36cm）が出土した。埴輪の全体比率から実物大の船を想定すると、全長約15m、幅約3m、20～30トンクラスの船で、数十人を乗せて外洋の航海が可能であったと思われる。

2000年には、さらに巨大な船型埴輪が三重県松坂市の宝塚1号墳（5世紀初頭の前方後円墳）で発見された。二つの楕円形の円筒台に乘せられており、全長140cm、最大幅25cm、高さ90cmと日本最大。太刀や蓋（きぬがさ）、威杖は甲板部に開けられた穴に差し込む形で飾り付けられており、船首と船尾にあった4枚の障壁は王の座を著す心葉形（ハート形）で、船体にはベンガラ（赤色塗料）が施されていた。装飾の豪華なこと、祭礼の場とされる造り出しの周囲で出土したこと、神聖なものを護り邪悪なものを退けると信じられていた赤色の塗装が施されていたこと、船の大きさに反して櫂の穴は左右に3か所しかないことなどから、この船は被葬者を黄泉の国に送る葬送儀礼に用いられたもの（送霊船と）考えられるが、船の基本構造は実際に当時運用されていたものを基にしていることは間違いない。埴輪の船首は、伊勢湾の方向となる東を向いており、国府の被葬者は伊勢から東国への進出に関わった水軍所縁の豪族であつたろう。

応神5年10月、伊豆国に命じて長さ十丈の船を建造させ、警戒に走るので枯野と名付けたこと、

また応神 31 (400) 年秋には、枯野が朽ちたため、新たに諸国から 500 隻の船が献上されたという記事が『日本書紀』にみられるが、5 世紀、倭の 5 王の時代ともなると、大和王権の朝鮮半島への進出は活発となり、中国大陆との往来も増えたことから、船の建造が盛んになった。船に関する一連の出土品の存在は、古墳時代の初期には、既に波の荒い外洋での航海も可能なかなり大型の準構造船が作られ、大和と瀬戸内海、さらに朝鮮半島との間を船団を組んで往来していたことを語り伝えている。

古墳時代の舟の構造は弥生時代のそれと基本的には変わらず、丸木舟に板を継ぎ足した準構造船（縫合船）であったが、鉄製工具と鉄釘の利用が広がり、船体の大形化が進んだ。先にも紹介したが、大阪市東成区今福鯉江川出土の大型刳舟は全長約 13 メートル、前後二材が印籠継ぎになって接合されており、完全な形だと全長は 20 メートル近くあったと考えられる。そのほかにも 10 メートルを超える大型刳舟が大阪市内から多数出土している。船型埴輪からも、かなり大型の準構造船が存在していたことが窺い知れる。玄界灘の荒波を越えて朝鮮半島に多くの貝や物資、馬などを運ぶ必要から、大和王権は大型の船を整備する必要があったのだ。

反対に朝鮮半島から倭国に馬を運ぶためにも、大型の船が必要であった。3 世紀に書かれた『魏志倭人伝』には、日本に馬はいないと記されており、わが国に馬と乗馬の風習が伝わったのは 5 世紀の頃とされる。4 世紀末以降、朝鮮半島に本格的に進出した倭国の軍勢が、馬の機動力を活かす高句麗の軍隊に苦戦を強いられたことがそのきっかけであった。高句麗軍に対抗するため、馬の機動力を軍事制度に取り入れる必要性に迫られた大和王権は、海が比較的穏やかな初夏の頃朝鮮半島から子馬を船か筏に乗せて運びこみ、また国内で生まれた子馬を飼育し、軍馬として増産するようになる。

大阪府四条畷市の葦屋北遺跡は、馬を載せた船や筏が朝鮮半島から瀬戸内海、河内湖を経て辿り着いた終着地であり、ここが馬を育てるためのわが国最初の放牧場、馬飼いの里となった。葦屋北遺跡とその周辺からは、丁寧に埋葬された馬の骨や永久歯計 500 点、それに鐙、鹿角製のハミ、鞍などの馬具が出土している。また 26 基の井戸も発掘されており、そのうち 7 基は馬の運搬に使用された準構造船を転用して井戸枠を作ったことが確認されている。

弥生時代以後の大型刳舟や準構造船の多くは、クス材で建造されている。クスの山地は本州では常陸以西の太平洋岸と瀬戸内海沿岸、四国に限られており、大型船が造られたのもクスの分布する地域と考えられる。具体的には、伊豆、駿河、遠江、近江、播磨、備中、安芸、周防、伊予などが造船地として記紀にもその名が記されている。ちなみに後の遣唐使船は奈良中期以降は専ら安芸で造られており、安芸には舟木郷という郷名が多い。奈良県の唐古遺跡や東殿塚古墳から出土した土器や埴輪には、帆らしきものを装備した準構造船が描かれており、帆船も導入されていたと考えられる。

ところで、東殿塚古墳出土の土器や珍敷塚古墳の壁画に描かれた船の舳には鳥が止まっている。鳥は長江文明のシンボルとされ、長江文明の系譜をひく雲南省の滇王国の銅鼓に描かれた船の舳先にもやはり鳥がとまっている。日本の海民のルーツを江南地方に求め得る一つの証左といえるかもしれない³²⁾。

[注釈]

- 1) 『産経新聞』2009年11月16日
- 2) 寺澤薫氏は、纏向遺跡は人工的な運河の開削からスタートしたと推察している。つまり、それまでは人が住んだ形跡がない場所に、計画的に新しい都市を作る目的で各地から人が集められ、その子孫達は何世代かにわたってこの地に住み着いたという。寺澤説では、纏向遺跡は3世紀初めに突如として出現した巨大な計画都市ということになる。
- 3) 大和が水上交通と関係深い地域であることは、古代、この地に大和湖が存在していたことにもかかわっている。意外なことに、奈良盆地の中央部には大規模な遺跡が発掘されていない。それは古代、盆地の中央部が湖であったためであり、唐古・鍵遺跡など発掘された多くの弥生遺跡は、古代の湖岸線沿いに存在していたと推定されている。万葉集にも、奈良で海をうたった歌がある。舒明天皇の、有名な国見歌もその一つだ。
「大和には 群山（むらやま）あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙り立ち立つ 海原は かまめ立ち立つ うまし国ぞ あきづ島 大和の国は」
天の香具山から飛鳥地域を見て詠まれた歌だが、海原、かもめなどが歌い込まれている。奈良盆地には、縄文海進の名残りといえる湖沼、池沼が各地に残存し、人の日常の居住活動が困難な大湿地帯だったことが推測できる。奈良盆地は、縄文海進の名残り、大和川を中心とする諸河川の氾濫原とで形成され、水や水運と縁の深い地域だったのだ。
- 4) 白石太一郎氏も、次のように述べている。「河内・大和が瀬戸内海航路の終点であり、また広大な東日本への交通路の起点であるという、物資と人の流通・交流システムの要の位置を占めていた……前面に瀬戸内海という東アジア世界に通じる海上交通の大動脈を、背後に東日本という大きなヒンターランドを抱えるヤマトの地理的な優位性が広域の政治連合の盟主と成りえた最大の理由であろう。」白石太一郎『古墳とヤマト政権』（文藝春秋社、1999年）78頁。
- 5) 北部九州の中でも筑紫、即ち伊都国の南、筑後川の流域は九州に勢力を広げようとした大和王権に最後まで抵抗を続けた地域であり、当然大和王権との接触も乏しかった。この地域を陥落させた後も、磐井の乱が起きるなど大和王権にとっては支配が行き届きにくい地域となった。奴国があった博多には住吉神社や志賀海神社等があるが、これは大和王権の半島進出の際に宗像などの海民が協力、奉仕したことに由来したものである。なお吉備については、勢力を強めた5世紀頃大和王権に抵抗したが、雄略天皇に鎮圧平定され（吉備下道臣前津屋や吉備上道臣田狭の反乱）、以後、衰退していった。こうした謀反の歴史から、吉備には大社、神宮はなく、官幣中社の吉備津神社があるに過ぎない。
- 6) 関裕二『神武東征の謎』（PHP研究所、2003年）185～189、194頁。
- 7) 吉田晶『七支刀の謎を解く』（新日本出版社、2001年）等参照。
- 8) 溝口睦子『アマテラスの誕生』（岩波書店、2009年）29～30頁。
- 9) 白石太一郎『古墳とヤマト政権』（文藝春秋社、1999年）13頁、都出比呂志『古代国家はいつ成立したか』（岩波書店、2011年）68頁。
- 10) 『日本書紀』の欽明紀以前の条には、速吸之門（明石海峡または豊予海峡か）の漁父、淳田門（福井県三方郡）の海人、吾登（藍島）の海人、磯鹿（福岡県志賀島）の海人、淡路御原および淡路野島（兵庫県淡路島）の海人、阿波長邑（徳島県那賀郡）の海人、吉備（岡山県と広島県東部）の海部直といった各地の海人がみえる。航海技術者の海人は「挟抄者（かじとり）」「海導者（みちびきひと）」、水軍のそれは「水手（かこ）」などと記されている。これらの記録を通して、海人族は製塩を含む漁携活動はもとより、航海技術者として、さらには、水軍の主力としても活躍していたことをうかがうことができる。森浩一代表『海と列島文化2 日本海と出雲世界』（小学館、1991年）183頁。
- 11) 藍島の文献での初見は古く、『日本書紀』仲哀天皇八年の条のなかに「阿閉嶋」と記されており、岡山主祖熊

鰐が天皇に献上した島である。ついで『日本書紀』には、住吉大神の加護を受けて、新羅征討をはたす英雄物語を記した神功皇后摂政前紀秋九月の条に、藍島の海人と思われる人物がみえる。「諸国に令して、船舶を集めて、戦争の準備に入ったそのとき、兵士を集めるのが困難であった。皇后は、『きっと神のみこころなのだ』と仰せられて、ただちに大三輪社を立てて、刀と矛を奉られた。兵士が自然に集まった。ここで、あへのあまおまろというものを、西海（朝鮮への航路）に遣わして、国があるかどうかを視察させた。おまろは帰還して、『国は見えません』と申し上げた。さらに磯鹿の海人で、名を草というものを遣わして視察させた。何日かたって、帰還して、『西北方に山かおり、その空に雲が横だわっております。おそらく国があるのでございましょう』と申し上げた。そこで吉日をとし、出発するのに日がかかった。」文中のあへのあまおまろが藍島の海人で、失敗したが、征討軍の朝鮮海峡渡航の海導者（水先案内人）に登用されている。案内に成功した磯鹿海人名草は「和名類從抄」にみえる糟屋郡志珂郷、博多湾口の志賀島の海人である。『海と列島文化 2 日本海と出雲世界』（小学館、1991 年）188～190、192～3 頁。

- 12) 海部は漁業と航海技術をもって奉仕した部で、海人部とも記す。記紀ともに応神天皇の時代に設定されたとする。遠海・越前以西に分布し、特に紀伊・淡路・阿波・吉備の海部は著名。
- 13) 大林太良編『日本の古代 8 海人の伝統』（中央公論新社、1996 年）252 頁。
- 14) 宗像大社は天照大神の娘の三女神を祀っているが、それは社家が宗形氏から 59 代宇多天皇の皇族に代わったからであり、宗像が大和王権と結びつく以前の祭神は、出雲から来た男神であると『宗像大菩薩御縁起』は伝えている。『宗像大菩薩御縁起』によれば、宗像神は、素戔鳴尊の十握剣と同体であり、宗像神が剣であつたときは、朝敵の蛇（八岐大蛇か？）を退治したとある。そのため、宗像族は初めから北部九州を拠点としていたのではなく、出雲から移ってきたことも考えられる。
- 15) 若井敏明『邪馬台国の滅亡』（吉川弘文館、2010 年）175 頁。
- 16) 「海北」の語は『宋書』夷蛮伝の倭王武の 468 年の上奏文にも「渡平海北九十五国」とあり、日本の海の北の朝鮮半島南部の地域を指している。したがって「海北道中」とは日朝交通路の意味になる。当時の日朝間の航路は、筑紫の那の津から直接、または唐津に寄ったあと壱岐・対馬・釜山に向かう路が一般的であった。なお海北道中を、この幹線とは別に、宗像経由の日朝航路を指すとの解釈もあるが、井上光貞はそれを否定する。井上光貞『天皇と古代王権』（岩波、2000 年）278、310 頁。
- 17) 沖ノ島については、弓場紀知『古代祭祀とシルクロードの終着地・沖ノ島』（新泉社、2005 年）、正木晃『宗像大社・古代祭祀の原風景』（NHK 出版、208 年）等参照。
- 18) 武光誠『九州水軍国家の興亡』（学習研究社、1990 年）178～182 頁。
- 19) 塩土老翁は、記紀の海神宮訪問神話で兄神・海幸彦に責められ困窮する山幸彦を海神宮へと教え導く役割を演じ、また『日本書紀』では神倭磐余彦（神武）の東征に際し、海路大和へ向かうべきことを示唆するなど住吉神と同様に先導神・航海神としての性格が強い。『日本書紀』の海神宮訪問神話（一書第四）では、吾田（阿多）地方の国津神・事勝国勝長狭が亦の名を塩椎神とも伝えており、塩土老翁は元来は薩摩地方の海民阿多隼人の祖神であったと思われる。宮島正人『海神訪問神話の研究』（和泉書院、1999 年）166 頁。
- 20) 遣唐使船は「四つの船」ともいわれ、通常四隻に分乗して渡唐し、航路安全祈願のため、その第一船の舳先に住吉神が祀られていた。遣唐使派遣に当り、大阪の住吉大社に奏上する祝詞が『延喜式』に記載されており、同書「臨時祭式」にも、大阪の住吉大社で催される「遣唐の船居を開く祭」の記載がある。これらの祭祀担当者は津守氏であった。『津守氏古系図』には、津守宿禰男足なるものが、「渤海神主」として登載されており、住吉神は遣渤海使船にも奉斎神として祀られたことが知られる。北見俊夫『日本海島文化の研究』（法政大学出版局、1989 年）205 頁。
- 21) 水野祐氏は、海神の宮の所在地を海底と考える潜水漁撈民と、洋上遙か彼方の地に存在すると考える釣漁海人や航海海人に分類し、浦島子伝説とかかわりの深い宗像を前者、安曇・住吉を後者に充てる。水野祐『古代

社会と浦島伝説（下）』（雄山閣、1975年）356頁。宮本常一氏は、瀬戸内海に宗像、安曇、住吉の三海民が混在していたとする。第一は、男女共漁をする海民で、北九州から下関海峡を経て瀬戸内海に移動してきた海民である。筏船を含む船底の広い船を持つ。彼らは宗像三神を信仰し、あわびや魚、海草を採取しながら移動する定着性の低い海民であった。第二は、男漁女耕をする海民で、南九州から豊予海峡を経て瀬戸内海に移動してきた海民である。大山祇を信仰し、四国側を中心に定着し、後に村上水軍などの海上の武装勢力を形成した。大山祇（オオヤマツミ）は「大いなる山の神」という意味だが、海の神で安曇の神である和多志大神（ワタツミ）の別名ともされる。天照大御神の孫である邇邇芸命と結婚する木花之佐久夜毘売命の父でもある。この南島系海民はシキ（船底板）発達型ではなくタナ（舷側板）発達型の船、沖縄のサバニのようなスピードの出る細長い船、を駆使した。第三は、半農半漁をする定着民で、古くから瀬戸内海に定着していた在来海民。住吉の神を祀り、遠浅で磯漁の条件の良いところに居住した。貝の採集に優れた技能を持っていた彼は、あわびの採取、交易、製塩などに従事し、供御人などに任ぜられて朝廷との関係を結んだ。宮本常一『宮本常一講演選集7 日本文化の形成 講義2』（農山漁村文化協会、2014年）所収「瀬戸内海文化の系譜」。佐々木高明氏は、宮本氏の第一区分を江南系の特徴とし、安曇、住吉、宗像（安曇が古く宗像が新しい）をすべてここに含め、祀神はワタツミの神とツツノオの神。第二区分は大山祇（オオヤマツミ）を祀る南島系で隼人など南九州の海人に連なると分類する。南島系海人は瀬戸内海にすぐに入らず、本州南岸を黒潮に乗って志摩から伊豆の三宅島、三島に展開した後、鴨氏と結びついて摂津から瀬戸内に入ったとする。佐々木高明『日本文化の基層を探る』（日本放送出版協会、1993年）178～182頁。『伊予国風土記』によれば、大山祇（オオヤマツミ）は仁徳朝の時、朝鮮出兵で航海神として神徳を発揮し、摂津三島に祀られたが、後に伊予大三島に遷移されたとする。大山祇は日向神話に登場するが、仁徳朝も日向と関係が深い。安曇、宗像は江南系（但し安曇は南島系の隼人とも関係あり）、大山祇を祀るのは南島系ということであろうか。

- 22) 田中拓氏は、遭遇地点について古事記の述べる明石海峡が正しいとし（神武東征の際祖最初の帰順功労者として大倭氏の立場を有利にするため、日本書紀では日向出発直後の奉迎と叙述されたとする）、サオネツヒコを大己貴神系（出雲系国津神）氏族で、西宮付近を中心に大阪湾の北岸に勢力を張り、西は明石の瀬戸を押さえる有力な海部の首長と主張している。田中拓『日本国家の成立諸氏族』（国書刊行会、1986年）141頁。
- 23) 恵美嘉樹『日本の神様と神社』（講談社、2009年）150～1頁。
- 24) 東方進出の水上拠点として重要視された伊勢は、大和の東方に当り、太陽神の霊地とも考えられていた。さらに壬申の乱における天武天皇に対する加護が契機となり、元来は一地方神であった伊勢の神が皇祖神であるアマテラスと合体し伊勢神宮へと発展していったと考えられている。溝口睦子『アマテラスの誕生』（岩波書店、2009年）142頁。
- 25) 4世紀後半から6世紀にかけての古墳で、阿蘇山系の凝灰岩を用いた石棺が四国の北岸を中心に河内、山城、紀伊にまで広がっているが、その分布が紀氏の勢力圏と重複することから、石材の運搬に紀氏が関わっていたことが推察される。武光誠『大和朝廷は古代の水軍がつくった』（JICC出版局、1992年）20頁。
- 26) 岸俊男『日本古代史研究』（筑摩書房、1966年）93～128頁。
- 27) 紀氏に関しては、専ら伊岸俊男『日本古代史研究』所収の論文「紀氏に関する一試考」、寺西 貞弘『紀氏の研究—紀伊国造と古代国家の展開』（雄山閣、2013年）を参照させていただいた。
- 28) 吉備の反乱伝承については、門脇禎二他編『古代を考える吉備』（吉川弘文館、2005年）120頁以下参照。
- 29) 『日本書紀』は、欽明16（555）年に蘇我稲目が吉備の児島に児島屯倉（白猪屯倉）と呼ばれる広大な大王の直轄領を置いたと伝えている。児島屯倉は、大和王権の朝鮮経営の拠点である筑紫の那の津と難波の津の中継地の役割を果たすことになった。欽明朝は、朝鮮経営のために大和と難波を結ぶ丹比道や古市大溝を設け、難波から児島を経て那の津に至る航路を整備している。武光誠『蘇我氏の古代史』（平凡社、2008年）59～61頁。
- 30) 平林章仁『謎の古代豪族葛城氏』（祥伝社、2013年）96～117頁。

31) 大林太良編『船』(社会思想社、1975 年) 67 ～ 9 頁。

32) 安田喜憲『古代日本のルーツと長江文明の謎』(青春出版、2003 年) 160 頁。長江文明圏では鳥を神霊の乗り物とみなし信仰の対象とされていたことは、梅原猛他『長江文明の曙』(角川書店、2000 年)、梅原猛・安田喜憲『長江文明の探求』(新思索社、2004 年) 等参照。